早期教育の光と影（1）

——親と子が考える、成果と問題点——

○深谷久美子
（名古屋電話相談員）

〇久保義美
（愛知みずほ大学大学院）

目的

最近、就学前児童を対象とした早期教育がブームとなり、早期教育によって子どもを伸ばすことへの積極的効果が期待されている。しかし、それとは逆の事例も報告されている（渡辺；2008, 池谷, 2009）。

早期教育を受けている子どもの親世代でも、早期教育を受けてきた世代である。そうした親たちが早期教育をどのように捉えているのか、また子どもたちの気持ちはどうか、成果と問題点に焦点を当てて比較することが、本研究の目的である。

方法

A県の小学校5校の小学生とその保護者に、習い事について質問紙調査を実施した。

結果

（1）対象者の属性：回収した質問紙は1,149世帯、回収率は89%であった。回答した親（母親）の92％が子どもの習い事を経験していた。ピアノ、そろばん、絵の割合が高く、子どもの習い事と重なる部分があり、母親自身習い事の成果と問題点を経験したことが自由記述にあった。

（2）習い事に対する子どもの意識：自由記述に、「習い事で友達がいるし、遊べるから嬉しい」、もっと遊げるようになりたい「最高に面白い」、友人関係に対する期待感や快適の習得による達成感など、自分の成長が実感できることに喜びや楽しさを感じているようであった。一方、習い事があるために自由な時間が少ないことに対し毎日あって疲れた」、「学校の友達と遊ぶ時間がほしい」「何も習いたくない」と、習い事を好ましく思わない子どももいた。

（3）子供の習い事に対する親の意識：習い事は運動系（37%）、学習系（44%）の方が多かった。これより親の「受験」や「進学」「成績評価」など、学力を付けたいという意識の奥深さと考えられ、親世代が中学、高校と英語を習ったが、生ききた英語を話せないという表現などが彼らの習い事に対する親の意識を示唆していた。親が習い事の成果と回答したことは、ある程度の期間継続することによって、「体力が付いた」「自信が付いた」「精神的に強くなった」「意欲的になった」などが、心の成長に関することである。

考察

（1）少子化の影響：少子化のために、以前は兄弟間で、自然に身に付いた思いやりや、社会性などが育つ環境や、環境が減少している。そのため、現在の小学生にとって、友達付き合いは、発達段階から親を視野に考える必要があるため、より重要性を増している。実際子どもたちは、習い事の場で、友だちと遊んだり話したりできるところを楽し、人間関係を豊かにする場として考えられる。

（2）習い事と親子関係：習い事が楽しいかどうか、親子関係に影響することがある。母子の愛着関係を考えると、親子が共にする時間空間を、母子関係は長く、親子の関係がよりよくなると考えられる。しかし、親子関係の影響を受けて自由に遊べない子ども達がおり、それにによるストレスから親子関係にマイナス要因となる場合があるなど、早期教育によって、得るものと失うものがあると考えられる。

（3）習い事を始めた理由と成果：親が子どもの自発性や自主性を習い事によって伸ばしたいと考えて親が興味を持ったと考えられる。実際習い事をして、「自信が付いた」、「目標を達成した」など、成果が見られたことが感じており、習い事に対する期待感が高まっている。しかし、早期教育は目的の達成のために母子ともに様々な価値を乗って取り組んでいることが、今回の調査から伝わってきた。

引用参考文献

深見稔幸：早く熟せば、早く腐る 教育と医学

第57巻12号